

子どもの情操と音楽の役割

1) - 宗教的観点から見た子育て -

土 田 定 克*

On the Cultivation of Children's Artistic Sentiment and the Role of Music
I. From Religious Perspective

Sadakatsu Tsuchida

子どもの情操の健全なる発達を援助する際の課題として、神によって美しく創られている心の純潔を「まずは守る」ということが挙げられる。その底辺を踏まえた上で、音楽などの精神文化を応用することの意味と効用を、市販されている童話・絵本との心理的接点を交えて考察する。

光溢れる子ども達の感性を見るとき、私たちはそこに天国のような心の状態を見出さずにはいられない。そのような子どもの心の状態を守り育むという動機から、子どもの情操に関わる音楽のあり方を問う。

キーワード 子どもの情操、音楽、心の状態、美しさ、天国

はじめに

「子どもの情操と音楽の役割について」は全2編から成る。第1編を成す本稿では子どもに関する「情操」と「音楽」についてそれぞれ深く追究し、それらを「宗教的観点」から見つめるという形式を取る。統合的な考察は第2編「2) - いのちのイントネーションについての考察 -」に待つとして、ここでは基本的考察を固める事を目的とする。

育児や保育に携わるということは豊かな創造性が求められるものである。そのため、生命の萌芽を扱う子育てを考える時、「創造の原点」にまず立ち返ってみる必要が生じる。そこで本稿では、第Ⅰ部「『光』に始まる創造」を踏まえた上で、第Ⅱ部「子どもの情操」、第Ⅲ部「音楽の役割」へと考察を展開していきたい。

Ⅰ 「光」に始まる創造

初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、
闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。

「光あれ。」

こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。

(創世記：1-1 ～ 4)

* 女子短期大学部 保育科

1) 天国の記憶

あらゆる創造の原点である天地創造を聖書の創世記から紐解いてみると、神はまず「天」を創られ、続いて七つの段階を追って霊界と物質界からなる「地」を造られたことが記されている。その全てが素晴らしく、神は「良し」とされ、祝福を与えられたと書かれている。人間一人一人の幸せのために、神はまず永遠不変なる「天国」を創られた。その「天」については、聖書はこれ以上語っていない。次に地を創られた。地はまず目に見えない霊的世界から創られ、続いて目に見える美しい世界、即ち宇宙・天体・自然・人・動植物等を造られた。したがって上掲にある太初「光」は太陽などのように目に見える光ではなく、霊的つまり精神的な「光」ということになる。この点は非常に重要である。なぜならこの世の創造の始まりにあったものは目に見えない精神的な「光」であり、決して無や混沌たる暗黒ではないのだということは、「創造」の源を探索する我々にとって大きな希望となるからである。聖書によれば万物の霊長である私達の祖先は、かつて神から授かった光の温もりを享受しながら楽園の中で暮らしていた。太古における幸福に満ち足りた楽園の記憶は、原罪による追放を受けた後にも代々受け継がれ、現今も人々の無意識の奥に潜んでいる。ゆえに人はいつも幸せを探し求めて生きているのである。

私たちはどんなに頑張っても、一番肝心なところはすべて受身な存在である。自分達の力ではどうにもできないように定められている。生まれること、死ぬこと、その場所も時間も方法も、我々の意志や希望を微量すら叶えることはできない。人生の、いのちの底辺の部分はずべて神の手の中にあり、その恩寵と祝福、愛のお陰で私たちが存在している事実を認めざるを得ないのである。人間を含め、被造物には神の愛と祝福が限りなく溢れているのだから、その愛に気づき、素直に受け入れることが幸せ（天国）へ近づく道なのかもしれない。

2) 創造力の源

育児にせよ、保育にせよ、子育てとは持ちうる限りの愛情を注ぐことである。人が変化し成長していくきっかけは教育のみでは足りず、むしろその子がたくさんの愛を浴びられるか否かに大きく左右されている。子どもには諸能力を身につける以前に、まずは愛されているという実感に満たされる喜びを噛み締めてもらいたいと思うのは多くの大人に共通することである。その上で少しずつ価値観や分別、変わらぬ愛情の中で育まれる上品な趣も身につけられれば幸いである。これが徐々に独り立ちしていく子ども達に援助を差し出す情操教育の、最も深い動機たる場所である。「身」についた「美」しさを、「躰」と書く。きちんとした躰に恵まれた人は、美しいものの価値を尊ぶことができるようになる。自分より美しいものや秀でたもの、或いは偉大なものに対して羨み競って傷つくのではなく、躰によって得られた畏怖・敬意・謙遜を胸に抱き、無条件に「自分より上のものを尊ぶ姿勢」によって自分自身の人生をより美しく創造していくことを可能とするのである。讃美する者は、その讃美する行為自体によって自身の内面をより豊かにするという言葉は真である。20世紀の大作曲家セルゲイ・ラフマニノフは天賦の才に恵まれただけでなく、幼児期においても貴人としての嗜みと躰とに恵まれた。この世の成功の絶頂においてもその功績を自身の努力や才能に帰することを頑なに拒み、無神論とキリスト者迫害の蔓延の時代の真只中で次のような信仰告白を残している。

「私の中にあるものは、全て、神からのものです。神を取り除いたら、私など、『無』なのです^(註1)」。

天才とは概して自分の才能が天から与えられたものであることを知っているものである。音楽の泉が神から来たものであることに感謝し、神を讃美するためにその創造力を捧げて作曲・演奏したのは何もラフマニノフに限らず、バッハやベートーヴェンをはじめ歴史上ほぼ全ての大音楽家に共通することは注目に値することである。

3) 被造物の美

私たちは太陽を直接目で見ることはできない。あまりにも強い光だからである。しかし私たちはその目では見ることでできない太陽の光を浴び、その恩恵に肖って生きている。陽だまりの心地よさ、晴れ渡る青空に向かって芽生える新緑の眩しさよ！動植物も日光を浴びて嬉々揚々となる。しかし太陽の光は絶大なため、私たちの目は一瞥することすら敵わない。この小さな眼には耐えがたい光だからである。それが私達と神様の関係のようなものである。ちっぽけな自分には見えないからといって「神はない」とは言い切れないのである。神の創られた大自然の全ては私達の生命を支え、偉大にしてかつ美しい。人の作るものは所詮その規模に及ぶことはなく、作れば反ってその美を損なうことすらあるほどである。ビルを建てれば、視界から無限に思えた空が減る。夜中に電気を燈していれば、夜空に輝く星も見えない。道にアスファルトを敷けば、通り過ぎるの風が運んだ土の匂いがなくなる。子ども達にとって大切な自然との触れ合いが日常から遠のいてしまうのである。だから我々はただ神の被造物に魅せられて感嘆し、神を讃美することしかできない。この世に神の被造物以上に美しいものはないのである。

II 子どもの情操

1) 善なる無知

さて、子どもの情操とは何であろうか。広辞苑で「情操」を調べると、「感情のうち、道徳的、芸術的、宗教的などの文化的・社会的価値を具えた複雑で高次のもの。〈哲学字彙 初版〉」とある。続けて「情操教育」とは、「創造的・批判的な心情、積極的・自主的な態度、豊かな感受性と自己表現の能力を育てることを目的とする教育。知性・道徳性・美的感覚・共感性などの調和的な発展をねらいとする。」とある。一瞬難解に見えるが、よく読むとその通りと理解できる。

情操とは読んで字の如く「情（心の中の想い）の操（みさお）」である。操は守るもので、守る時にこそ力を発揮するのである。神の被造物である「心」は善にして美しく創られているのだから、創られたままの心を守るだけで情操教育の半分(?)は済んだといっは過言であろうか。また「操」は「純潔」とも読み替えられる。興味深い事に「純潔」とはロシア語で「целомудрие>希σωφροσύνη」と言い、読んで字の如く「欠陥無く万全なる智慧（分別）」である。日本語の「純潔」にもあるように、操を守るためには、正しい分別を持ってだめなものだめとする「潔さ」が欠かせない。操を守った婚約者を「невеста」と言う。「未だ知らない者」という意味である。

「知るべきこと」と「知らなくてよいこと」を分別することは、特に幼児教育において要求されていることは論説の言を待たない。しかし人には「知りたい」という欲がある。人類の楽園追放はまさに善悪を「知る木」から、禁じられた木の実を取って食べたことに始まっている。それに対して「善なる無知」という言葉がある。「知らない」ことは、「知っている」ことと同

様に、或いは時としてそれ以上に大切だという意味の言葉である。これについては例えば童話絵本で、「ほくだけ しってる（森山宮子作）」を挙げることができよう。きつねのこんすけは花と蝶々しか知らなかった。くまの子やうさぎの子は船やバスを知っているのに、こんすけはそれらを「知らない」ことを恥ずかしく感じた。しかしその「知らない」という状態がどれほど尊いことか。大人の目から見れば子どもがバスや船を熟知していることよりも、蝶々や花に囲まれた日々を過ごし、虹に見とれて感動できる心を保っている方がよほど健気に見えるのである。船やバスを子どもが知ようになるのは時間の問題で、別段急いで知らなければならぬものではないのである。この絵本の後書きは、作者の次のような文で締めくくられている。

おとなたちは、子どもが「何をどれだけ知っているか。」を重視しますが、「何とどういう会いたをしたか。」ということも大事なことでないでしょうか。「虹はいつも太陽の反対側に見られ、朝は西、夕べは東の空にある」ことを先におぼえるよりも、とつぜん雲間にあらわれた七色の輪に見とれて、小さな胸を喜びいっぱいにするほうが、その子どもの未来は楽しいものに思えるのですが。

人は何も知らない真っ白な状態で生まれ、徐々に様々なことを知っていく。そこで人生の土台を築く子ども時代に何をどのように知っていくのか、その過程における質と量のバランスが肝心になってくるのである。上述の如く、森山宮子氏はその量はさて置き、何よりも質の重要性について触れられていることが分かる。多くを知らないからこそ、子ども達は勇気と力が湧き出て色々なことに挑戦していけるのである。何度も転んで痛くても練習を重ねて自転車に乗れるようになるように、未知から溢れる好奇心や興味によって生き生きとしているのである。そのため大人であれば絶対にしないこともする。守られた情操（みさお）から進る勇気や気力を見てみると、知らないことがそのまま子ども達の生きる力になっているようにさえ見えてくる。その点、大人の情操はしばしば知識の過重により、日々にときめく喜びに欠けがちであるかもしれない。知っているがゆえに疲弊している様子もしばしば見受けられるのである。「もののけ姫」以来、ひたすらに「生きることの素晴らしさ」を自分の芸術で訴えてきた映画監督・宮崎駿氏は、その最新作「崖の上のポニョ」について次のようなコメントを残している。

「どんな時代であっても、5歳の少年から見たこの世界は、生きるに値する素晴らしい世界ではないだろうか」。

この台詞も、まだ多くを知らない子どもの情操がこの世界の素晴らしさを最も鋭敏に感じ取ることのできる事実を如実に言い表しているとは言えないだろうか。したがって、子どもたちの情操を守る上では、上述のように私たちは子ども達が「知らなくてよいこと」にも細心の注意を払う必要があると考えられるのである。

2) 知ること

「知ること」の対として挙げられる大切な力の一つに、「信じること」が挙げられる。「知ること」とは「見ること」であり、「信じること」も「観ること」であるから、両者はその実、同じことを意味するのだが、その違いは「心の眼」で観るか、「頭の眼」のみで見るかの点に係ってきていると言えよう。

例えばシリアの聖イサアク（7世紀）はニネベの主教座を自ら辞して隠遁生活に入り、その中で心の神秘を探求した偉大な修道士だが、彼は「知ること」と「信じること」の相違について詳細な研究をし、その要旨をまとめると次のように述べている。「『知』には不安が伴う。そのため自然の法則に仕えることを余儀なくさせる。しかし『信』は、すべてを凌駕する^{（註2）}」。これは、行き詰まった時、「知」を働かせて出口を探す方法と、「知」に頼らずに肝を据えて真っ直ぐに進む方法とがあるが、後者を勧めている節である。「知」は前もって結果を模索する習性を持つため、リスクの高いものからは事前に辞退する軟弱さに縛られているということである。知ることによって先行きが案じられ、怖気づいて自分に安全と思われる檻（自然の法則に無理のないこと）を拵えて居座り、良心の命ずる一步が踏み出せない心理的現象を指している。人が「信じる」のならば、「知らない」ことは恐れではなくなる。不信から不安が生じるためである。「知ること」にはない大きな力が「信じること」にはあり、信じる心には保障がなくても前進できる力が与えられるのである。

知ることと信じることの違いについての良き例は、太宰治の「走れ、メロス」が適当かもしれない。かの時、メロスもメロスの友も、友情を守るために「信じる力」が試されたのである。メロスを待つ友にとって、沈んでいく太陽は過酷に映った。このような場合、もはや人はやってこないという経験上の「知識」が、たとえどんなことが起こっても帰ってくると約束した友を「信じる」気持ちに影を落としたのである。一方走り続けたメロスは遠く夕陽を見据えて、普通このような時、間に合うかわからないのに走ることは徒勞であり、むしろ今疲れ切って倒れる自分には情状酌量の余地も無きにしもあらずという一般的な「知識」が、友に誓った思いと奇跡とを「信じて」走る足を僅かながらも躊躇わせたのである。「友は来る」或いは「友のために走る」と全力で信じた結果、自然の法則では封じられていた壁をぶち破り、人として、また友としての美しさを死守することができたのである。

3) 祈りを生む静けさ

情操が守られて育った子どもの心には、美しいものを美しいと感じられる感受性が兼ね備えられている。鋭敏な感受性は、雑多な刺激の中では麻痺するために育むことができない。それは静けさを必要とする。物質的にも精神的にも静かな環境を必要とする。静けさによって内面の活動が促され、創造のプロセスが始まるからである。静けさは飛翔する心の空間であり、「祈る」心のオアシスである。人が人である以上、祈りの姿勢は欠かせない。心が「主＝大事なもの」から離れてしまうからである。内なる静けさとは祈りに限りなく近い状態である。その貴き静けさを生活から奪い、雑多な知識や印象を頭と心に投げ込んでくるメディアなどの影響は、子どもの情操の健全なる成長への配慮から非常に気をつけなければならないことであると考えられるのである。

以上のことから、子どもの情操とは、①大人からの援助が欠かせない時期において大人によって守られるものであり、②進んで選ばれた「（不要なものを）知らない」中で、③周囲からの愛情に満たされながら全てにおいて「天国」を感じることができると言えるであろう。

Ⅲ 音楽の役割

1) 導かれるイメージ

さて、子どもの情操の基盤を確認した上で、次は子どもの情操を豊かに養う上での「音楽」の役割について話を進めてみたい。しかし「音楽」の役割を考える前に、まずは「音楽を感じる」とはどういうことであるかを、次の詩を読んでから考えてみたい。

うたの なかの はたの ように

うたの なかの はたの ように。
そらの なかの やねの ように。

かぜの なかの ネジの ように。
あめの なかの にじの ように。

うみの なかの ブイの ように。
みずの なかの うおの ように。

よるの なかの ほしの ように。
まちの なかの はなの ように。

よだ・じゅんいち

「音楽とは何か」を探索している私に非常にショッキングな形で飛び込んできたのがこの詩であった。「・・・ように。」の後には、それぞれ「気高くあれ」「優しくあれ」「美しくあれ」、そして「自由であれ」とでも言っているようにも受け取れるのだが、そこは読者の自由な想像に任されている内容の詩である。一言で言えば「・・・の ように、生きたい」、或いは「・・・の ように、生きろ」とでも言っているのかもしれない。そのように「導き」は与えるが、最後まででははっきりと言い切らずに受け手のイメージ（想像）に結論を託す点は、常に象徴的である芸術の持つ最大の特長だといえる。象徴の世界では語弊による理解の行き違いが起こらない。また、真実の言葉は刃のごとく鋭利なために人を傷つける恐れがあるが、芸術言語ではたとえ真実を真っ直ぐに語ってもその心配がない。深くも浅くも個々人の許容に応じて自由な解釈の余地が残されているからである。つまり、語り口が「象徴」というオブラートで包まれているために優しく聞こえるので、聞き手にとっても受け入れやすい媒体なのである。音楽は人のイメージ（印象）を膨らませる。絵本、童話、映画などから人々がある一定のイメージを抱くことができることと同じことが、音楽を聴くことによって起こるのである。音楽は喜怒哀楽、過去・現在・未来などの時間を超えた存在を限られた時間のなかで象徴的に語っている。そのため音から色や絵や感情が、心の状態が、鳥が弧線を描いて大空を飛び回るように、人それぞれの想像の中で自由に創造され得るのである。

上掲の詩を見ると、日常生活のなかで奔走していると一瞬見過ごしてしまいそうな、見えにくいところにある小さな大切な存在に光が当てられている。目を向けているさり気ない大切な

存在は、それを包み込む背後の懐の中で静かに黙している。その大切な存在とは、もしかしたら、子ども達であるかもしれないし、或いは無意識の奥深いところに眠る、私達一人一人の純真にして愛らしい子どものような心かもしれない。「うたの なかの はたの ように。・・・」そう、まさに「うた」とはシンボル（象徴）であり、その中には中心となる「旗」のようなものがある。「うた」の内容によって、旗の形や色、模様は様々である。たとえ傷だらけになってしまっても、それも立派な旗なのである。旗は普通、旗の元にいる存在を象徴しながら風に流されてはためいている。例えば戦の中では皆が旗を仰いで見方の軍勢の位置と戦況を察するのである。旗が倒れれば味方の命が取られたことであり、旗が折れても倒れずに靡いていればまだ生きているという訳である。そのため旗はいのちの目印であり、別名「いのちの証」とも言える。これは何も戦に限ったことではない。鯉のぼりもまた、伝統的に旗の如き役割を演じている。端午の節句にこいのぼりが上っている庭があれば、その家族には男子がいる証である。旗は空に昇る心の象徴である。そして見上げて謳われるものである。旗にはそのように人の意気を高揚させる力がある。その旗が、「いのちの証」である旗が、「うた」の中心にあるというのである。（この考察の続きは、後編『2）いのちのイントネーションについての一考察』の中で更に深めたい）。

2）具体例で見る「童話（絵本）と音楽との心理的接点」

大人と子どもでは、音楽・絵本・遊び、どれをとっても感じ方が異なるものである。子どもほど敏感に感じる事はできなくても、大人は思想や人生経験を通して更に深く読み取ることができる。音楽を感じるためには、自然と触れ合った時に美しいと感動する気持ちや、「楽しい」「面白い」「嬉しい」「哀しい」という多様な気持ちを日々の生活の中で感じ比べ、その異なる気持ちを十分に淘汰してひとつにまとめた「人生経験」として消化し、自分の感性の血肉となっていることが求められるのである。感受性如何によって、ひとつの音楽からも人それぞれ様々な感じ方をするものである。

例えば、ラフマニノフ晩年の作品「パガニーニの主題による狂詩曲 作品43」など、私自身この曲を理解するのにあたって非常に長い年月を経たことを告白しなければならない。特に際立って有名な第18変奏曲を例にとってみよう。青年時代の私にとってこの曲は涙なくしては語れない胸の疼く「感動的な再会」として映った。しかしその直前の奈落の底から聞こえる呻きのごとき第17変奏曲との兼ね合いや、また狂詩曲全体の中における位置づけと意味合いから考えると、どうも「感動的な再会」ではびたりと合点がいかなかった。ところが、長年いつも心のどこかでその意味を追求し、子育ても三年目に入ったある日、子どもと一緒に絵本や童話を読んでいてこの曲の深い意味を発見したのである。その童話（絵本）の題名は「きいろいばけつ（森山宮子 作）」である。本の内容を要約すると以下の通りである。

月曜日、きつねのこんすけが橋の袂できいろいばけつを見つけた。色といい形といい以前から欲しいと思っていたばけつそのものだったが、仲良し友達のうさぎの子やくまの子と相談して「きいろいばけつの持ち主が現れるまで一週間待とう。現われなかったら自分のものにしよう」と決めた。

一週間の間、今か今かと楽しみに待ち続ける。毎日気になって仕方なく、雨の日もきいろいばけつの様子を見に行き共に行き遊んだ。遠くから眺めたり、持って橋を行き来してみたり、水

を汲んで魚を釣る真似をしてみたり、近くの木の下に優しく水をかけたりした。一週間の間、大切に、精一杯の優しさを込めてばけつと遊んだ。

日曜日の夕方になっても持ち主は現れなかった。「大丈夫。明日はぜったい君のものだよ」と友達も言った。その晩、寝る前に、きつねの子はばけつを見に行く。頭の上には明るい月が光っていた。ばけつはいつものところで夜風に吹かれてカタカタ音を立てていた。「飛ばされたら大変だ」。水をたっぷり汲むと、水の上に丸い月が映った。きつねの子はばけつに手を振り、月にお休みを言って家へ帰った。

夜更けに目を覚ましてばけつを見に行くと、月の光の下でばけつは金色に輝いていた。その時、急に強い風が吹いてきてばけつを吹き上げ、月に向かってみるみる小さくなっていってしまう…という夢を見る。「待って!」。手を伸ばしても届かない。「待ってったら!」。自分の声が目覚める。

そしてとうとう月曜日、朝早くきつねのこが来てみると、きいろいばけつはなくなっていた。「残念だなあ」、「誰かが持っていったのかしら」友達が口々に言う。でもこんすけにとってそれはどちらでもよかった。たった一週間だったが、ずいぶん長い間、きいろいばけつと一緒にいたような気がした。その間、あのばけつは他の誰のものでもなく、いつも自分のものだったと思った。「いいんだよ、もう」。きつねの子はきっぱり言うと、顔を上げて空を見た。青い青い空が、どこまでも広がっていた。「いいんだよ、ほんとに」。きつねの子はもう一度そう言うと、友達に向かってにこっとわらってみせたのである。

上述したラフマニノフの音楽は、まさにこの「心の状態」を象っていたのである。人生の秋に遠く祖国を追われても、一番帰りたいところに二度と帰れなくても、万感の想いを空に向けて「いいんだよ、もう」。そして優しく微笑むのである^(註3)。たとえどんなに別れが辛くとも、ある期間共にいられたことに感謝し、運命によって離されてもよしとする潔い気持ちは貴くはないだろうか。その感情を、心の状態を、ラフマニノフは大人の言葉で語り、森山宮子氏は子どもの言葉で語った。きいろいばけつは、もしかしたら自分の子どもかもしれない。もしかしたら私達の故郷や両親、延いては人生そのものかもしれない。それは落胆を伴った力ない諦めとは違う。永遠の深みから今を見て、一時的に自分に与えられていただけのものを「ありがとう」の気持ちを添えてお返しするのである。胸底に涙が滲んでも、微笑を湛えて温かく見送るのである。長年探していたものは、非常に美しい紳士的な「諦観」であった。「さよなら」をすべき時に逆らわずにさよならできる、物事に執着しない高貴な心であった。

3) 「心の旅立ち」を促す音楽

音楽は、目には見えない、手に取れない、残らないものである。そのため、ただ単に「聴いていなさい」と音楽を流しても子どもは感じることはできず、その音楽の持っている意味やメッセージは子どもの心の奥底にまでは届かないこともしばしばある。それでも、一度聴いた音楽は心のどこかに印象として残るものであるから、蒔かれるべき種として、やはり幼児期から良き音楽に触れる機会は努めて持っていきたいと思うのである。ひとつの作品の意味を理解するまで、上述のように20年以上かかっても良いのである。あるいは一生理解などできなくても良いのである。あまりにも美しい夕陽に、兎にも角にも出会ってみることが大事なのである。そしてその美しさに見とれて、その美しさの向こう側に隠された意味を探索する心の旅立ちの、

初めの一步を踏み出すきっかけを子ども達に差し出すことに意味があるのである。子ども達の人生をより高度な興味で満ち、趣味（好み・嗜好性）を磨き、より人間として充実した日々を送るためのきっかけを幼児期に与えられるよう慮ることが我々の課題なのである。

上述の具体例からも伺えるように、良い童話（絵本）と良い音楽には共通する点が多い。両者には、大人になっても忘れてほしくない「子ども達に伝えたいこと」が同じだからである。同じ情操から生まれているからである。大事なことはただひとつ、それはいのちの源（真理）に繋がっていることだからである。「ストーリー（流れ）を注意深く追う」という点においても、子どもの集中力を育てる上でどちらも貴重な教材であるといえる。歌は記憶に残りやすいため、童話や絵本と同様、一生の財産に成り得ることができるものである。一度聴いた音楽は「あつ聴いたことがある！」として、それだけで親しみを増すものである。まるで子どもの頃の明るい家庭に帰ったかのように心理的に安心した気持ちになるものである。同じ音楽を、時を経るごとに再聴することによって、その汲めども尽きない深みに改めて感動することもできるのである。大人と違い、子どもは生まれた時には自分では何もできない受身の存在であるから、心身ともに多くのことを大人が援助しなくてはならない。十人十色、その子によって需要も異なるため、その子の個性に見合った環境を整えることが、保護者や保育士にできる情操教育の形態であるといえよう。そのような気持ちに基づいた環境構成が、子どもの心のケアにもなり、子どもの心の成長をいつもどこかで支えつつ見守っていることになるのではないだろうか。

4) 「人生の感じ方」を諭す音楽

「音楽を感じる」とはどういうことかを考えた上で、引き続き、子どもの情操を養う上で「音楽はどのような役割を果たせるのか」を考えてみたい。

音楽は、しばしば天国の状態を表している。そのため我々は時に癒され、平安を得るのである。疲れたときなどにも、頭を働かせなくても直接心に入っていくので、音を媒体とした柔らかな愛で人を包み込むようなことができるのである。音楽は温かい言葉、美しい言葉、天国からのメッセージである。丁度、詩や俳句があるように「音」という「言葉」を用いて人々に語りかけるのである。音楽は、音になったメッセージである。音楽は音楽言語という独立した言語である。音楽は世界中の人々に伝わる万国共通語である特権を用いて、深い思想や感情を、人生の喜びを音で彩るメッセージに託して讃歌しているのである。

上述した「童話（絵本）と音楽との心理的接点」の具体例からも読み取れるように、音楽は「人生の感じ方」を表しているものである。最も深いところでは無力で受身でしかない人間に対して、絶望に陥る前にもうひとつの「人生の感じ方」を諭しているのである。例えば、重度の難聴に罹り自殺まで考えた偉大な音楽家ベートーヴェンがその第5交響曲において訴えたかったことは何であろうか。逆らえぬ冷酷な「運命」に如何に驚愕し、如何に葛藤し、そして如何にしてそれを受け入れて運命と和解し、創造主を讃える状態にまで至ったか、その経緯が注意深く曲に耳を傾けていると明らかに見えてくるのである。彼自身の遺した名句、「Durch Leiden zum Freude!（苦悩を突き抜けて歓喜に至れ!）」の言葉の通りである。

また、音楽は「生命の神秘への深い感動」を表しているといえよう。例えばバッハのシャコンヌ。心の眼が真っ直ぐに虚空を仰ぐ垂直感に漲っている。或いはベートーヴェンの「悲壮ソナタ^(註4)」。「悲壮」とは、「あわれにまた勇ましいこと。悲しい結果が予想されるのにも拘らず、雄々しい意気込みのあること」という意味である。つまり受難をも忌まない崇高な心の偉大さ

を謳っているのである。よく音楽を聴いて涙する人々を見かける。これほどまでに直に人の情感に訴えてくる芸術があるのか。音楽は「同情（共に泣き）」「共感（共に喜び）」「奨励（勇気付ける）」の力を持っている。したがって子どもの情操に大きく役立てられるのである。私自身が幼児の頃、よく父がチャイコフスキーのピアノ協奏曲のレコードをかけてくれていたことを記憶している。レコードに針が落とされるまでを見守る間、心がときめいていたことを覚えている。全世界に轟くようなホルンの音色が曲の開幕を告げると、その度に表情が晴れ、雄大なテーマに合わせて台所のおたまを振り回しながら飛び跳ねて喜んでいただそうである。（その頃の体験が実りに実って、後にロシアに留学することになったのだとしたら、実に親の愛には頭が上らない）。

5) 音楽という薬

大人の援助により音楽のメッセージを捉えることができれば、子どもは一瞬でその音楽の示している「状態」に入ることができる。一瞬にして自分の置かれた世界が変わるので、人生への感じ方が変わり、諸問題への捉え方が変わるのである。「音楽は心の薬である」と恩師メルジャーノフ教授は度々話されたが、誠に示唆に富んだ言葉だといえる。音楽はその語り口が大切である。強さを内に秘めた柔和な温もりで吐露されるときほど、人の心を揺さぶって止まない。演奏者は、その人生で心を揺り動かされたすべてのものへの想いを音に込め、飛び立つメロディーに自分の心を乗せるのである。また時に音楽はその持ち前の強力なエネルギーで人の潜在意識に眠る崇高な感情を喚起し、明日へと向かう勇気を鼓舞する。水よりも滑らかに、風よりも穏やかに、気付かれずに聴き手の無意識の奥底に届いて作用する。もしかしたら、その聞き手は今、心の奥底で寂しい想いや孤独感を秘めているかもしれない。そういう無意識の部分に届き、「一人ぼっちじゃない」と囁いてくれるのである。大きな宇宙（全体）の中における小さな自分という存在を確かに感じることができるのである。だから先ほどまで大きく見えた自分を取り巻く諸問題も、音楽を聴いた後では小さなものに見えてくることがあるのである。その意味で、音楽は鏡のような役割をも持っているといえよう。音楽を静聴していると、自分自身の存在の本質が見えてくるのである。自分自身を見つめ、日々の歩みを補正することができるのである。そのような経験の反芻により、変化または成長していくのはその人の美意識や美的感覚であり、心の趣きや好みである。心の趣が変わればそれに左右される生活習慣が変わり、日々の積み重ねである人生全体が変わっていくのである。子ども達に善きものへの「好み」を養う環境を用意するのか、それとも悪しきものへの「好み」に傾くのを放置するのかで、その子どもを取り巻く将来的な友人関係や活動範囲、没頭してエネルギーを傾ける対象が変わってくるのである。「類は友を呼ぶ」というように、子どもの心の琴線がどういうものに共鳴するのが、大事なポイントなのである。善なる無知の中で音楽などの美しきものに触れる機会を多く持った子と、全くそれらに触れる機会に恵まれず、あまり守られずに育った子とでは、育まれた感受性や情操が異なるため、同じものを見ても違うように考え、同じ境遇に陥っても違うように行動するようになるのである。当人には無意識かもしれないが、これもその時まで培われた情操の演じるところである。

以上の事柄を総括して喩えると、幼児期からの情操教育は、家の庭を彩ることに似ていると言えるかもしれない。雑草が生い茂る前に、庭の雑草は取り除くものである。雑草は根を張れば勢いづいて、なかなか抜くのにも厄介だからである。十分に陽の光を浴び、時に適って雨に

潤い、大人によって雑草を抜かれて良き種を植えてもらった子どもの心の庭は、時の経過とともに色とりどりの喜びの花を咲かせることであろう。

Ⅳ 総合的考察

以上の考察により明らかになったことを以下に要約してみたい。

- ①人はその心の状態如何によって、天国を感じるか、否かが左右されてくるということ。
- ②子どもの情操は、「守る」ことに始まること。
- ③良い趣味の絵本・童話・音楽に触れることは情操教育上、有効であること。
- ④即結果の出るものに限らずに、将来的に実を結ぶ種をも長い目で見て蒔くこと。
- ⑤磨かれた情操は子どもの好みを洗練し、未来に羽ばたく心の翼に成りうること。

子ども時代の情操を取り巻く環境の大切さは上述した通りである。しかしどんな子どももやがては大人になり、大人になれば周囲に守られてばかりはいられないのが人生である。喜びの時もあれば、疲れて倒れることもある。しかしどんな環境に巡り合っても、その人が幼児期から培った情操は奪われることのない精神的な財産であり、困った時こそ力を発揮してその人を守ってくれる真の友である。盗まれるものでも、潰されるものでもない。簡単に得られるものでもない代わりに、簡単に失われるものでもない。歳月を重ね、たとえば思うように身体が動かなくなったとしても、心の状態は、その多くが本人の意志に属し、本人の気持ち次第で変化させる事ができるものだからである。如何なる環境に取り巻かれても変わらずにいられる心の状態を得られた人は幸いである。幼児期からの情操を大切に守り育まれれば、どんな状況においても天国を感じられる心が養われるのである。一人一人が天上の愛によって満たされていれば、その人がその満ち足りた愛を隣人と分かち合い、生きることの素晴らしさを共に喜ぶことによって「いのち」の温もりが広まる。まるで泉に一滴の雫が落ちて広がるように、一人が変わることによって全体に波及し、全体が変わっていく。一人の心が変わることからすべてに広がっていく。一人一人の大人が変わればそれが子ども達にも広がり、子ども達が変わる。そしてその子ども達が跡を継ぐ日本の未来が変わっていく。

最後に、本稿で述べたように、幼児期からの情操教育に取り組むことによって現在社会問題になっている数々の事象が改善され、一人でも多くの人が人生の意義と幸せを感じられるようになるであろうことを信じている。また、私自身に与えられた全ての良きものを音のメッセージに託して学生に、また直接子ども達に伝えていけたらと願っている。保育の道へと進む本学の学生諸君が、温かい「いのち」を宿した一滴の雫となって子ども達の泉へと溶け込んでいき、この国の未来に明るい光を広げていってくれたらと祈っている。

註

註1 《Все, что есть во мне - от Бога. Без Него я - ничто》. 1933年、ブリュッセルにおけるインタビューに答えてラフマニノフが語った言葉（《Сергей Рахманинов. Две жизни》より）。この言葉はラフマニノフの名句の一つに数えられている。ロシアでは、音楽施設の壁面には大作曲家の肖像画が多く掛けられているが、筆者は在露中、実際にモスクワ音楽院附属高等学校の廊下においてラフマニノフの顔写真の下部にこの言葉が飾られているのを見た（2000年頃）。

註2 《Ведение со страхом служит естеству. Но вера - превосходит его》. Слово 25-тое. Стр. 186 ~ 210.

Преподобного Исаака Сирина 《Слова подвижнические》 Правило веры, 2002

註3 本当はここで実演すると生の体験と成り得るのだが、紙面のため、楽譜掲載にて読者の方々の脳裏にその全体像が響くよう祈るしか術のないことをお赦し願いたい。

ラフマニノフ 『パガニーニの主題による狂詩曲 作品43』より 第18変奏曲（旋律のみ）



註4 「悲壮」は、普通「悲愴」と訳されているが、完全な誤訳である。「悲愴」は「かなしく^{いた}愴ましいこと」であり、「悲壮」は「あわれにまた勇ましいこと。悲しい結果が予想されるのにも拘らず、雄々しい意気込みのあること」である。原語の Pathétique は、語源を辿れば *πάθος*（熱情）に遡るため、当然、「悲壮」の方が正しい訳語である。

因みにこのような「異文化不理解」による誤訳は意外と多い。思いつく限りを連挙すると、

例：リスト「超絶技巧練習曲集」から『雪かき』→正しくは『吹雪』。同左『狩』→正しくは『天軍の凱旋』。文学では、トルストイ『戦争と平和』→正しくは『戦争と人間社会』である。

参考文献

園部三郎 『幼児と音楽 なにが大切なのか』 中公新書 215

森山宮子 作 土田義晴 絵 『きいろい ばけつ』 あかね書房、2007年

森山宮子 作 土田義晴 絵 『ばくだけ しってる』 あかね書房、2007年

与田準一・川崎大治・乾孝 編 『ね、おはなしよんで』 童心社、2006年

Б. Никитин 《Сергей Рахманинов. Две жизни》 Классика - XXI